

### 【 プロジェクトの概要 】

2019 年度より開始した大竹手すき和紙保存会との連携は、現在も様々なプロジェクトとして継続的に行っている。今年度は地域展開型アートプロジェクトとして、地域の伝統技術の継承を目的としたより実践的な展開を試みた。

大竹手すき和紙は現在、産業としては絶たれているが、地域の住民を中心に、広島県またはその周辺地域からボランティア（会員）を募り、保存会を中心に楮栽培からその加工、漉き手の育成から手すき和紙製造まで一貫して行なっている。その背景には、大竹市がその手すき和紙から作られる手描き鯉のぼりを市のシンボルと捉えていることもあり、有形として後世に継承をと関係者の強い思いからに他ならない。しかしながら、地域の高齢化とともに人手や材料不足が大きな課題となっている。本プロジェクトでは素材や道具と密接に関わる工芸（芸術）という研究を行う教育機関として、地域の資源、地域の人との関わりを見直し、それを礎に成り立つものづくりの本質を捉え、その専門性を活かす場を創出することを目的とした。また作り手として、その場所との関係を築き継続することで、制作の基盤となる環境を整えながら、自己の表現を探究することを試みた。

### 【 プロジェクトでの成果等 】

手漉き和紙の伝統技術の継承として、原料となるコウゾの栽培法及び紙料を作る工程と、大舟を使った流し漉きの一連の作業工程を、おおたけ手すき和紙保存会の協力のもとで、大竹市防鹿のおおたけ手すき和紙の里にある施設を利用して、プロジェクト参加学生と地域実践演習の履修学生の計 8 名を指導した。地域実践演習の取り組みでは、「地域にある伝統工芸の今を考える」ということをテーマに、現地での体験や交流を通して捉えた現状の課題について、各々の専門分野の視点から和紙の新たな活用に着目した取り組みの成果発表をおこなった。

## 1. おおたけ手漉き和紙についての講和と現地見学 (6月22日)

- ・おおたけ手すき和紙保存会の森本会長と和紙を漉かれている竹中さんの講義と実演

大竹市防鹿にある和紙を製造する工房（おおたけ手すき和紙の里）にて、保存会会長と手漉きを行う会員による講義を行なった。プロジェクト参加学生は、大竹和紙の歴史や製造工程を実際の機械や道具、製作途中の和紙などを見ながら説明を受けることで理解を深めることができる。

## 2. コウゾの栽培法 芽かき作業 (7月10日)

- ・保存会が管理しているコウゾ畑にて一斉に芽かき作業を行う



コウゾの生育が進み葉も多くなり、幹が人の背丈ほどに伸びた頃に、幹と葉の間から脇芽が出る。それを放置してしまうと枝分かれして、幹が真っ直ぐ育つことを妨げてしまうため、その脇芽を一つ一つ手で取り除く必要がある。広大な畑での作業のため人の手を多く必要とする。保存会ではその時期にボランティアを一般の方から募り行っている。芽かきが不十分だと歩留まりが悪くなり、和紙の質にも大きく影響するため、大変重要な作業となる。芽を取る方法を教わりながら2ヶ所の畑を3時間ほどかけて行った。





### 3. 紙料についての講義 小舟を使った溜め漉きの実習 (8月23日)



会長から和紙の原料となる紙料づくりについての話の後に、漉き舟を使った溜め漉き実習を行なった。地元の小学校の卒業証書用に使われる小ぶりの簀桁を使い、水が張られたトロ舟にネリ（夏場は化学ネリを使用する）と紙料を加え攪拌した液から掬い上げ、水平を保ちながら簀から水が抜けるまで静止して1枚の和紙を漉く方法となる。紙厚の調整や均質な和紙を漉くことは難しいが、溜め漉きならではの表情が得られる。

### 4. 大舟を使った流し漉き講義と実習 (9月7日)



大舟を使った実習では、実際に保存会で販売している大判の和紙を漉くことができる。手順は溜め漉きの場合と同じだが、馬鍬と呼ばれる道具を使い、水に加えたネリと紙料（テギ紙）をより細かく攪拌する。水は井戸水から引いており、水道水よりも冬場は温かく扱いやすく、夏場は冷たいためネリの効きも良いとされる。簀桁は大判を漉くため大きいので、前後に可動し易くするため天井から紐で吊るされており、流す回数によって厚みを調整しながら、紙料の塊などを流し落とせるため、均質な和紙を漉くことが可能である。昨年度に刈取りされたコウゾから作られた紙料（テギ紙）を使って、学生8名が交代で和紙を漉く。職人の指導を受けながら、数枚漉くとある程度の道具の操作を出来るようになるが、これを数十枚と同じ厚みで漉くことは容易ではないことが体験を通して理解できる。



## 5. コウゾの加工実習 1 (9月7日)



前年に刈取りソブリ（黒皮を削ぐ）した後に、束ねて干し保管しておいたコウゾを、水に晒し灰汁を抜く。大釜で沸かした湯に苛性ソーダを加え、そこに水で柔らかく戻したコウゾを入れ煮る。コウゾを引き裂き繊維の状態を見極めながら釜から上げ、直ぐに水で苛性ソーダを洗い流す。煮立った湯気は独特な香りがする。実際に手に取り扱うことで伝わる技術を感じることができる。数日おいたコウゾが日光により白くなることも、直接目にして実感することが重要となる。



## 6. コウゾの加工実習 2 (11月19日)

コウゾの葉が全て落ちた時期を見計らって、コウゾの刈取りを行う。葉がないことで作業がし易くなることもあるが、一度葉が落ちきっていないコウゾを刈り取った際に、手や首などに樹液が付着して炎症を起こしたことがあった。1.2メートルにカットして揃えた束を、150キログラム分一度に大釜で蒸す。蒸すことで幹から樹皮が剥がし易くなる。蒸し上がったコウゾを保存会員と近隣の住民、ボランティア 20名ほどで一



気に皮を剥がしてゆく。地元のご婦人方は談笑しながら、手慣れた手つきであつという間に皮を剥いでしまう。それにつられ、参加した学生も楽しく作業をおこなっていた。

## 7. 成果物発表

現地での体験をもとに、プロジェクト参加学生が各々の取組み成果を発表した。素材に大竹手漉き和紙を使用した人形や装身具、和紙を中心としたイベントの提案や照明のプロダクトや茶室空間としての利用など、様々な提案があった。



切手のデザインに使用されたモチーフや色をもとにキャラクターにした張子の人形  
大竹和紙の提灯紙と障子紙を使い、和紙の柔らかな質感を出している。  
(学部3年 金本 莉於)

ハンドメイドの材料として大竹和紙を使い、花の形をした半球の張子を大小组み合わせたリングとブローチ。重ねる枚数によって大きさや展開が可能となる。

(学部3年 金本 莉於)

### 3. 課題解決のための案

ハンドメイドの材料として張り子を使う



## 内容

- ・大竹和紙で制作した船を小瀬川に浮かべ、船の中に楢を入れ壊れずに遠くまで流すことを競う
- ・和紙の薄さごとにレースを分けて行う
- ・先頭は船が追いかけて和紙の里と繋いでビデオ中継
- ・大会と同時に和紙の手漉き体験やフォトコンテストお祭りなどを開催

開催時期：8月ごろ

場所：大竹手漉き和紙の里

優勝景品：広島市立大学芸術学部生の和紙作品+1万円+地元企業の製品



地域の祭りをテーマにした和紙を使った舟の川下りレースイベントの提案。舟の中にコウゾの木ガラ（コウゾの皮を剥いだ幹）を入れ、小瀬川の上流から下流まで流し距離を競う祭り。保存会に集う人とふれあう中で発案されたものである。(学部3年 山口 雄人)



油を筆で染み込ませた大竹和紙の提灯紙を使った照明器具。油を引いた箇所は透けが強くなり、あかりを通した際に模様が浮かび上がる。右は、その表現を使った茶室の提案。内と外、日中と夜間の和紙を通した光の演出に着目したものとなっている。（学部 3年 橘 真友紀）

その他に、プロジェクトに参加した博士前期の学生が、修了制作において大竹和紙を使用した作品を発表した。（博士前期 2年 張 敏）

この度のプロジェクトは、手漉き和紙という製作過程の一部に関わるという程度であるため、技術の習得までには至らないが、そこにある風土や人から得られる情報を共有する「伝承」を重視した取り組みとして、ある程度の目的は達成できたと考えている。しかしながら、より専門性を活かした具体的な取り組みや、体外的な発表が不十分であるため、継続した取り組みが必要である。

以上